様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月１８日現在

機関番号：10101
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2009～2011
課題番号：21730511
研究課題名（和文）　社会認知的エコロジーとしての教室への適応過程:参加役割の習得に注目して
研究課題名（英文）　The process of adapting to the classroom as a socio-cognitive ecological situation
研究代表者
伊藤　崇（ITO TAKASHI）
北海道大学・大学院教育学研究院・助教
研究者番号：20360878

研究成果の概要（和文）：
本研究の目的は，小学生が教室談話に適応する過程を，他者の発言に対する「聞き方」の発達的変化という観点から明らかにすることであった。協力校１校の１，３，５年生における国語の一斉授業をビデオ撮影し，視線の微視的な分析を実施した。その結果，１年生では教師の視線を追従していた一方で，３年生以上になると教科書などにも注意を払いながら聞くようになっていたという学年間の発達的な差の存在が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
The objective of this study was to shed light on the processes by which elementary school pupils adapt themselves to classroom discourse and how they listen to others from the perspective of developmental change. Japanese language lessons conducted in the first, third, and fifth grades of a consenting school were recorded by video, and then a microanalysis of gaze directions of teachers and students was conducted. The results revealed the existence of developmental differences between students in different grades. Whereas pupils in the first grade simply followed the teacher’s gaze direction, from the third grade and onwards, pupils listened to others while also focusing their attention on items such as textbooks.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1000000	300000	1300000
2010 年度	700000	210000	910000
2011 年度	1000000	300000	1300000
年度			
年度			
総　計	2700000	810000	3510000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学、教育心理学
キーワード：一斉授業、参加構造、小学校、聞くこと、視線、相互行為分析

１．研究開始当初の背景
教室において教師や児童が展開する談話を研究する教室談話研究は、授業をコントロールする教師と発言する児童とのやりとりを分析することを主な方法論としていた。しかし集団内には、発話はしないもののその場

に居合わせる大勢の児童がいる。従来の教室談話研究では、方法論的にこれらの児童の行動を見落としてきたのである。

この点を批判して Erickson（1996）は、教室談話を「社会認知的エコロジー」という観点から記述することを主張した。この観点は、次の２点を強調する。第一に、教室には多数の人々が存在するという事実である。第二に、教室内のやりとりは多数の人々が相互にやりとりをしあう複雑なシステムである。

教室談話を社会認知的エコロジーという観点から分析する上で、参加者のとる役割（参加役割）に注目する必要がある。参加役割の多様性に由来する問題として、多人数会話を円滑に進めるため、参加者は常に「今、自分はどのような役割を担っているのか」を判断し続けなければならない。

たとえば、教室で「話し手」となるためには、他の参加者がそれ以外の役割を引き受ける必要がある。従来の教室談話研究では、「聞き手」（listener）としての参加者の行動については研究がなされてきた（例えば Cook, 1999）。しかし、聞き手の中にも、発話に対して返答する義務をもつ者（addressee）とそうでない者（side participant）がいる、あるいはそもそも参加しているとはみなされない者（by-stander）がいるといったように多様性が存在する。

そうした役割の多様性について幼児期から児童期にかけての子どもがどのように理解するのか、また、多様な役割をどのようにして習得し、利用するようになるのかという問題については不明な点が多い。特に、小学校入学後にこれらのスキルに発達的な変化が起こるかどうかは不明である。幼児期に培ったコミュニケーション・スキルは入学を機に変化をこうむる可能性が高いと推測される。

２．研究の目的

本研究は、小学校における一斉授業場面を対象として、非発話時における児童の参加、特に「聞き手」としての参加の具体的な様相とその変化の過程について、明らかにすることを目的とした。具体的な目標は以下の２点であった。

（１）直接的に授業の進行にかかわっていない児童の言語的・非言語的行動（たとえば、私語、視線、姿勢）の詳細な記述を作成する。

（２）個々の児童における、上記（１）の参加役割に関する種々のコミュニケーションの具体的様相について発達的過程を明らかにする。具体的には、１、３、５年生の比較を通しての横断的研究と、各学年の２年間の追跡的調査を通しての縦断的研究の両面から検討する。

３．研究の方法

本研究では、小学校１、３、５年生の授業場面に対する２年間の参与観察を行った。公立小学校１校の協力を得て、保護者からの同意を得られた児童の発話および行動を分析することとした。

観察者がその場で記録可能なことには限界があり、直接的な観察データのみでは相互行為の詳細な分析は困難である。したがって本研究では、教室内４～５箇所にビデオカメラを設置し、なるべくすべての授業参加者にかんする行動データの映像記録を収集した。さらに、協力を得られた児童の襟元に IC レコーダを装着してもらい、詳細な発話資料を得た。記録をもとに言語行動（発話内容）と非言語行動（視線および姿勢）の両側面からトランスクリプトを作成した上で、授業中に起きた出来事を相互行為的な観点から分析した。

視線については、得られた映像を１秒ごとに１フレームずつ抽出したうえで、参加者の視線の向け先を次のカテゴリーでコーディングした。①教師、②児童話者、③児童次話者、④児童前話者、⑤その他児童、⑥机の上、⑦黒板、⑧不明、⑨その他。

４．研究成果

本研究より、次の４点が明らかになった。

①教師の視線配布行動について：　教師の視線配布行動は、発言する児童を頻繁に見る、発言していない児童を頻繁に見る、黒板を頻繁に見るという３つのスタイルに分けられた。

②児童の視線配布行動について：　児童が視線を向けやすい対象は学年間で異なっていた（図１）。１年生は教師に頻繁に視線が向けられていた一方、３・５年生は、発言する児童や机の上にあるものに視線が集中する傾向があった。このことは、授業に参加する児童がその内容を理解する際に、教師や書き言葉（机の上の教科書類、黒板）の手がかりとしての利用のされ方が学年間で異なる可能性を示唆する。

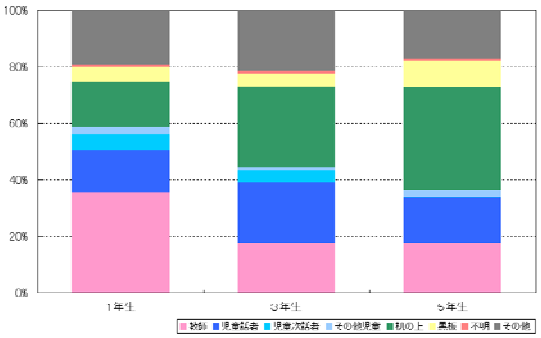

図１　各対象に視線を向けた割合の学年間比較

さらに、１年生から２年生にかけての変化を検討したところ、次のことが明らかになった（図２）。１年生の場合は、教師を手がかりとする傾向が強い一方、２年生になるとその傾向は相対的に弱くなり、反対に机の上や黒板といった書き言葉に視線が向けられる頻度が高くなった。

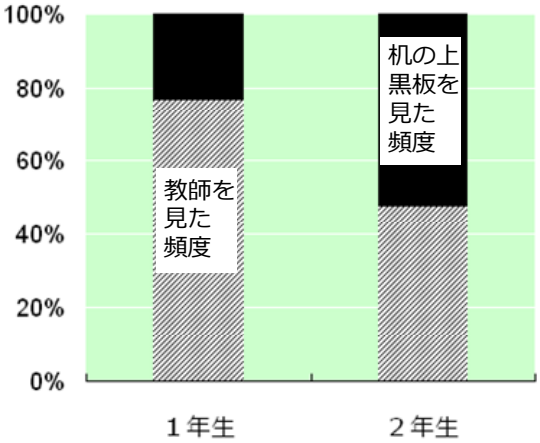

図２　「発言する児童」を見た１秒後に視線を向けた対象の割合

このことは、学年に応じて、一斉授業の参加構造が変わることを示唆する。すなわち、１年生では教師との二者間会話的な関係性が授業の前提にある一方、２年生になると、他者や書き言葉も含む多人数会話的な関係性を前提として児童が授業に参加するようになるのである。

③教師と児童の視線配布行動の関連について：　教師と児童の視線の向け方との関連を検討したところ、一斉授業での教師と児童の視線の向け方について、対象によっては強い関連性が見られた。第一に、発言する児童をめぐっての関連性である。教師が発言する児童をより多く見る学級ほど、同様に児童もより多く見ており、結果として机の上を見る機会が少なかった。第二に、発言する直前の児童をめぐる関連性である。教師が次に発言する予定の児童を多く見る学級ほど、児童が黒板を見る機会は少なかった。第三に、黒板をめぐる関連性である。教師が黒板を見る機会が多い学級ほど、児童は机の上や黒板を多く見ていた。

上記の点を相互行為的な関連性から見ると次のことが明らかとなった。教師を見ていた児童が教師の見る対象に視線を向け直すという連鎖と、教師を見ることなく自律的に視線を動かすという連鎖の、少なくとも２つの連鎖パターンがあった。

本研究の意義としては２点指摘できる。第一に、授業中のコミュニケーション様式の発達過程について素描できた点である。従来は、１～２の学年だけを取り上げた研究が多かったために学年間の比較が困難であった。本研究は低・中・高学年の横断的比較を通して、発達の道筋に見通しをつけることができた。第二に、授業実践への示唆である。特に低学年においては、教師の視線の向きが児童の視線の移動と密接に連動していたことから、教師にとって視線などの非言語行動について自覚しながら授業を行うことの重要性を指摘することができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①伊藤崇・関根和生、小学校の一斉授業における教師と児童の視線配布行動、社会言語科学、査読有、14 巻、2011、141-153

〔学会発表〕（計５件）
①伊藤崇・関根和生、授業において児童は発話をどのように聞いているのか（５）、日本発達心理学会第 23 回大会、2012.3.10、名古屋国際会議場（名古屋市）
②Takashi, Ito, & Kazuki, Sekine、How do elementary students listen to the speech during Japanese language lessons?、ISCAR International Conference 2011、2011.9.7、Frentani Congress Center, Rome (Italy)
③伊藤崇・関根和生、授業において児童は発話をどのように聞いているのか（４）、日本教育心理学会第 53 回総会、2011.7.25、かでる２・７（札幌）
④伊藤崇・関根和生、授業において児童は発話をどのように聞いているのか（２）――教師と児童の視線配分の関連性――、日本教育心理学会第 52 回総会、2010.8.29、早稲田大学（東京都）
⑤伊藤崇・関根和生、一斉授業において児童は発話をどのように聞いているのか、日本発達心理学会第 21 回大会、2010.3.26、神戸国際会議場（神戸市）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者

伊藤 崇（ITO TAKASHI）
北海道大学・大学院教育学研究院・助教
研究者番号：20360878

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：